

牽牛花

美倉茉莉

建安十三年、後に魏の武帝と呼ばれる曹操が烏丸征討を果たした翌年の夏であった。

雨が降っている。

昨日までの火照った空気を手荒く冷ました雨音が、失神するよう

に眠っていた郭嘉かくかの意識を引きあげた。

度重なる喀血に喉が渇く。ぎしりと音を立てて寝台の横に置いてある水差しに腕を伸ばそうとして、ねじれた上体に押し出されるようにこみ上げるものがあつた。

かは、と乾いた咳をした男が、背を丸めて口元に手を押し当てる。切り裂くように鋭い咳を止むまで丸まって耐えた寝台には、泡立った血に真っ赤に染まった上かけと、肩で息をする病的に痩せた脊中だけが残された。

地を打つ雨の音が激しい。庭先に植えられた朝顔のことが、えらく心配だった。もうすぐ晩夏も終わってしまう。

確実に命をすり減らす、自らを苛む真っ赤な病理の色を眺めながら、毎朝とりどりの花を咲かせて病んだ心を慰める朝顔が、ふと狭まる視界にこびりついた。

郭嘉という男は、予州は潁川えいせんの人である。

後に病を得ての夭折を大層曹操に惜しまれたこの男は、数年前から血痰を吐くようになった。時を置かずして喀血もする。

要するに肺を病んでいるのであった。呼吸困難もたまさかではない。

「北、か」

烏丸遠征の際、曹操は郭嘉を従軍させることを渋った。

献策のさなかに咳が止まらず血痰を吐き、恐ろしいほどに真っ白い顔をした彼の口元だけ赤く汚れているのを、幾度となく見ていたからである。このような曹操の寛容が示されるのは、神算鬼謀と謳われたこの薄命な軍師か、自身の従兄弟たちに対してのみであろう。

いまだ群雄入り乱れる乱世を前にして、郭嘉の前任となる男も若くして亡くしていた曹操は、若い郭嘉の才を失うことを恐れた。

「病か、奉孝」

不快を示して細められた目が、

乾きかけの血を骨ばった手の甲で拭う男に視線を投げた。

「申し訳ございませぬ」

伏せた視線の先に、渴いて色を変えた血の赤が見えた。だらしなく伸びた爪の間に、凝固して汚らしい黒ずみがこびりついている。気持ちが悪い。

今度は胃からせり上がって喉を焼く衝動を感じて、結局一つの進言もなせずに下がった。注がれる苛立ちの視線は、自惚れでなければこの命を失うことへの恐怖であるはずだった。もう酒も共にできない。

誰にも言ったことはないが、庭に咲く朝顔は主君から寄越されたものである。

水をやればすくすくと蔓を伸ばし、朝日を浴びて花開き、夕べを待たずに萎れていく。

寝台の上からそれを眺める郭嘉にとつては、この天賦の才を生かす乱世こそが己を生かす場所である。内政は不得手だ。なにより好かない。

寵愛を得られたのは、その才を愛されたからだだった。自ら馬を駆り、献策して喜ばれることはもうない。

「病が重いのか」

かつて曹操に郭嘉を推挙した同郷の男が、北から帰ってきて以来病に倒れたらしいと噂を聞きつけて、郭嘉のもとに見舞いに訪れた。

じゅんいく 荀彧という、自身もまた曹操の

寵臣である背の高い男が来た和家人がいうので、郭嘉は病身をおして濁った空気のとぐまる寝台を這い出してきた。

「そうですねえ」

「もう長くないのか」

「恐らくは」

「殿はなんと言っておられる」

「殿は」

す、と息を吸うと肺が傷んだ。

傷つけないように、ゆっくり唇の端から息を吐き出す。

「殿は、死ぬなど」

仰せられました。そつとため息を殺したような吐息が、どちらからともなく零れ落ちた。

牽牛花というのは、朝顔の別称である。由来は諸説あるらしい。

ところで、中国で起こった七夕伝説は後漢のころには既にあつたといふので、死期を悟って床に伏した病人が牽牛星に思いを馳せていても、問題はないわけである。

あいにく祈るにはいささか
時期を逸してしまったので、ただ
それに意識をやるだけだが。

ビルが立ち並ぶ、一八〇〇年ほど
前の話である。

幕僚の中では飛びぬけて若いと
はいつても、妻子持ちのいい年し
た成人男性が天帝にお願いごとを
して、叶えてもらえるところと思えな
い。それは仕方がない。

太陽とともに萎れる朝顔が病床
に沈む自分なら、朝に咲くみずみ
ずしい花は、凋落の象徴であるは
ずがない。

朝が来るたび、男はひそやかに
花を眺めて曹操の覇道を思った。

雨露を浴びてきらきらと光る

喇叭らっぱ型の鮮やかな花が、太陽が中
点にかかったころから勢いを無く
してきた。短い絶頂だ。

それでも朝には、また上向いて
天帝の涙でも吸うのだろう。そう
してつよく咲く花なのだ。

季節は初秋に移り変わろうとし
ていた。頬を撫でた風が冷たい。

郭嘉（一七〇～二〇七）

※牽牛星 彦星。

建安一三年、死去。

中国は後漢末期。鄧小平による
改革開放路線を皮切りに、著しい
経済的発展を経て諸都市に超高層

第三回突貫工事企画号

2014年10月27日発行

編集人 渡科由太

印刷所 広島大学文団BOX